

Philippe フィリップ ワイズベッカー

Weisbecker

独特のデフォルメされた作品で知られる

フィリップ・ワイズベッカー。
彼の眼差しに映るものとは?

協力／貴田奈津子、ハモニカブックス、CLASKA Gallery & Shop "DO"



Interview

—昨秋に日本で2年ぶりの個展を2カ所で同時開催しました。

今回の個展についての感想を教えて下さい。

ワイズベックー 私が日本で初めて個展をしたのは、2000年にギヤラリーギャラリーにおいてでした。2年前の個展では、それ以降の制作を回顧した展示を行いました。つまり、8年間に描きためた作品です。今回は、CLASKA & Gallery Art Unlimitedにおいて、最近2年間の新作を展示了しました。

以前から私の作品を知っている方々が、よりシンプルになつた現在のスタイルも好んで下さつたのは、私にとって最もありがたい贈り物でした。

—今回の展示で印象的だった、紙面を黒く塗つて白の線を残すという試み(P.6上)について教えて下さい。ワイズベックー 黒がないと、写真も撮れません。撮影から現像まで、すべて黒を通して行われます。黒がないと光もありません。そしてカメラと電球を黒バックで扱うというアイデアが浮かびました。

ネガテイプで描くことは、オブ



を使いましたが、コラージュというやり方に満足できませんでした。それから、アルミニウムの粉末をこすつて付けたら良い結果になるのは?と考えたのです。もちろん、その後でこの粉を定着させなくてはいけませんが、期待していた効果を出すことに成功しました。

それから、このアルミニウムの粉をグラファイトの粉末と混せてこすつたら、鋳鉄のような見え方になります。そこにも気がつきました。お蔭で、Tanks & containers のシリーズがGallery Art Unlimitedで展示できたのです。私はこのテクスチャーが気に入っています。フォルムに重みを加えていると思います。紙の軽やかさとのコントラストが印象的だと思うのです。

—銀色のグラファイトを使用した作品も気になりました。どういった制作過程を経たのでしょうか? ワイズベックー 以前、紙に鏡のシリーズを描いていた時に、グラファイトの粉やアルミニウムの粉のような反射する素材を使うアイデアを得ました。

—脱毛器というモチーフには驚きました(P.7左下作品)。モチーフを選ぶ視点がとても面白いと思うのですが、モチーフはどういった基準で選ぶのでしょうか?

ワイズベックー 選んでいる訳ではありません。私の眼差しが私を案内してくれるのです。私の眼差しは自分で選ぶのでしょうか?

ワイズベックー 選んでいる訳ではありません。私の眼差しが私を案内してくれるのです。私の眼差しは自分で選ぶのでしょうか?

です。だから私の手にとつて制作可能な物だけを選ばせるのです。

私にとって、技術的にうまい絵を描けるというのは、ハンドメイドになります。手が目よりも早く動いてしまい、よく検討されずに巧みさだけの結果になつてしまいそうです。

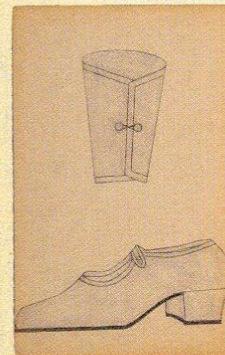
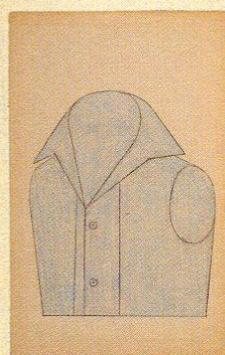
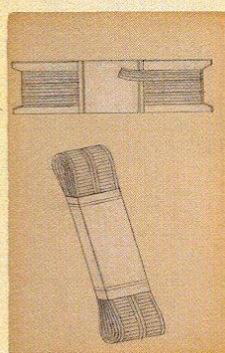
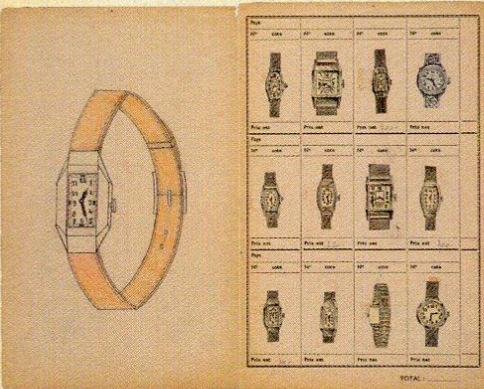
脱毛器を選んで描いたのは、私の眼差しがそのオブジェに興味を惹かれ、私の手でも描けると思ったからでしょう。

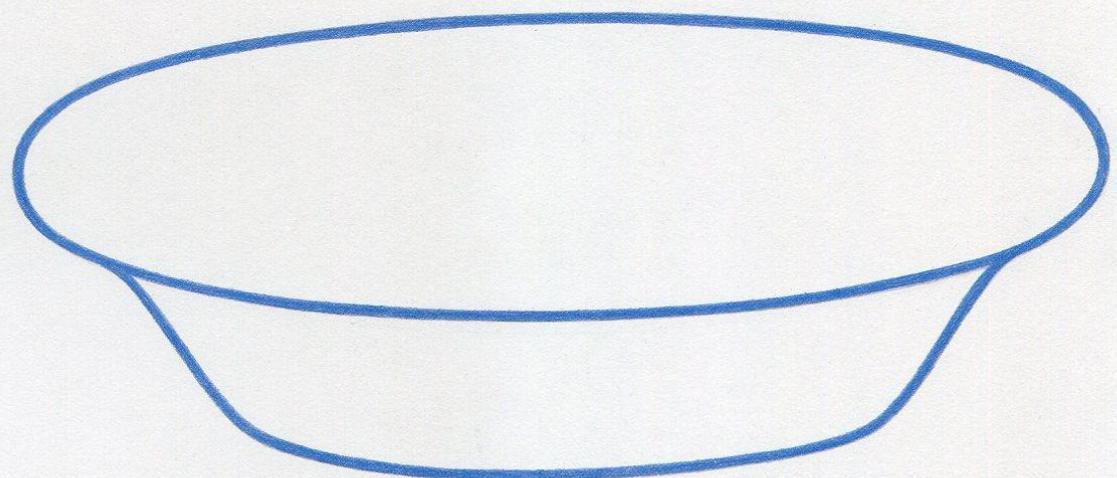
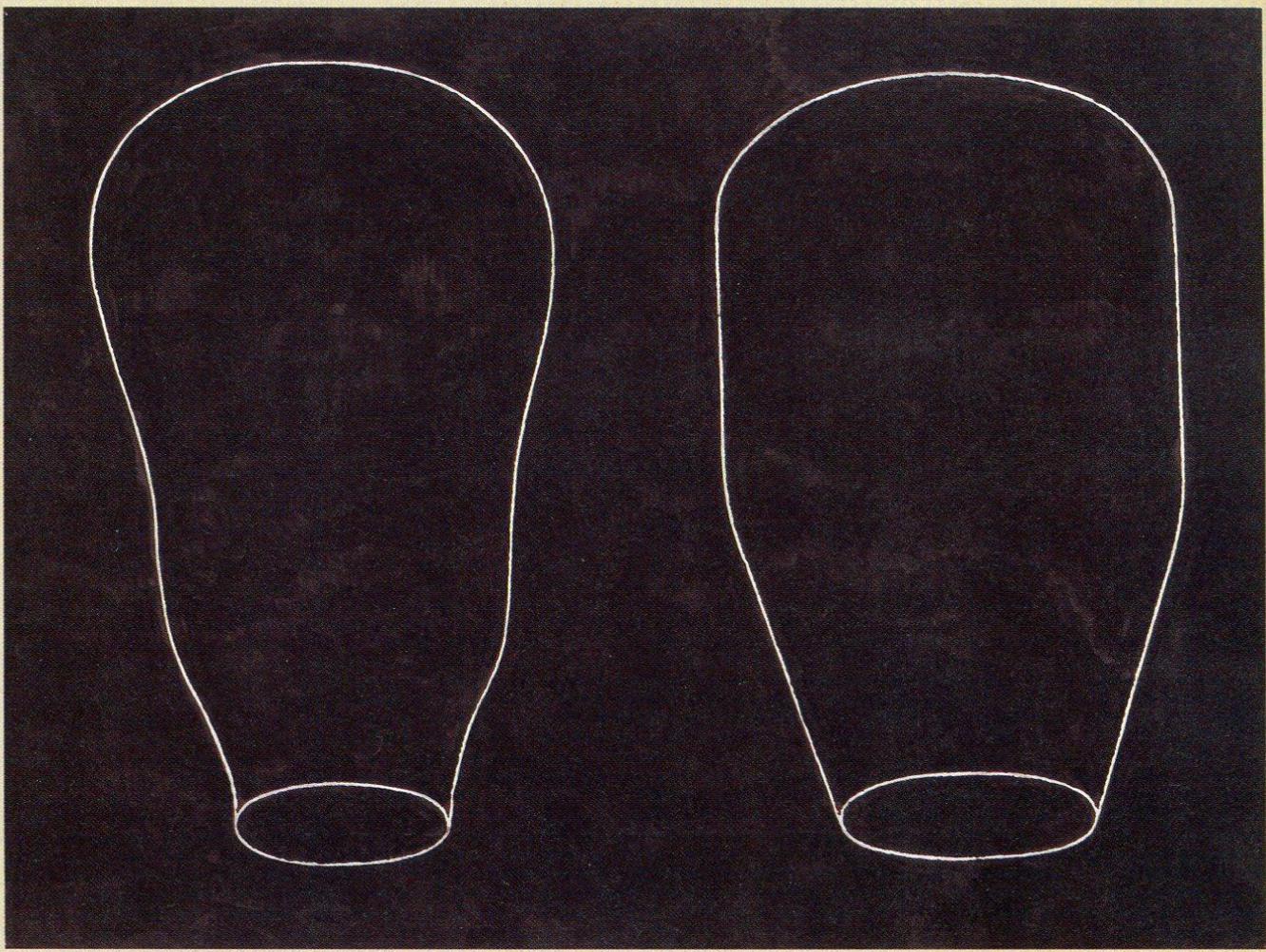
—今、気になるモチーフはありますか?

ワイズベックー 現在気に入つて描いているオブジェは、ますますシンプルになつてきています。

ミニマルな世界へと招かれているのです。そこでは、ライン(描線)のみがオブジェと化すのです。しかし、そこまで完全にはまりこむのがまだ少し怖いので、極めてベーシックなオブジェに付き合つてもらつているというわけです。

—昨秋の展示では、葛西薫さんがディレクションをした4冊の作品集がありました。これら作品集について教えて下さい。

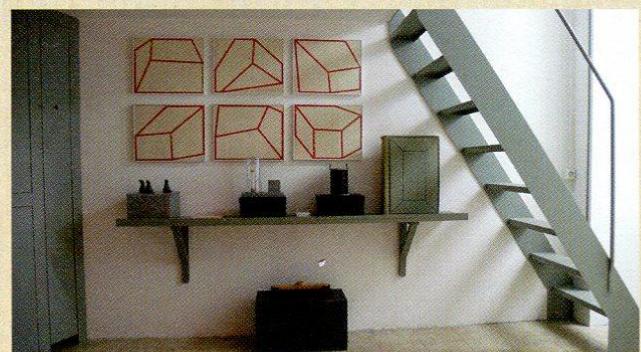




ワイズベッカー またまた、日本の方々の完全主義には感嘆いたしました。ハモニカブックスで発行されたノートにしても、クラスカでの展覧会カタログにしても、私の期待以上の結果になりました。制作の完璧さに加え、ディテールにおける洗練さ。何よりも紙の選択が素晴らしいです。非常に感銘しています。

——やや漠然とした質問ですが、ワイスベッカーさんにとって「デフォルメ」とは何でしょうか？
ワイスベッカー 毎回、新しいデッサンを描き始める時、選んだオブジェを紙の上で、どうしても平らにしてしまうんです。3D立体を紙等の平面と同じ2Dにさせるのが好みなのです。

そうするとオブジェにはもはや私の気持ちにひつかかりを起こさせる、突き出た角と脇部分がなくなります。そのオブジェの殻が眼差しに与えるものと、紙等の支持体との間は切り離せないものとなり、そこにすべてのミステリーが存在することになるのです。いずれにせよ、私が描くこれらのオブジェは、ひょっとすると、野心的な探求を遠回しにしたものな



消しゴム 私にとつては鉛筆と切り離せないものです。間違った方に進んだと思う時、方向性を変えさせてくれるもの。行ったり来たりした跡、私の迷いや過ちへの気づき等を（消し跡として）紙に残すので、絵を観る人には、私の歩みをご覧いただけます。

定規・とても重要です。なぜなら、私ではなく、定規がデッサンにフルムを与える描線をつけるのですから。私は、手を持ち上げて描く自分の描線に全く信頼をおいていません。慣れすぎたり、型にはまつたりしやすいからです。定規で引く線は、正直で匿名性があります。自分の好きなものを表現するのに適しています。

——自身にとって、欠かせない画材のかもしまれません。つまり（その野心とは）私たちを取り巻く物たちの神秘（ミステリー）を発見しようとすることです。

紙…紙の選択は最も重要です。なぜなら紙次第で描かれたオブジェの性質や雰囲気、周辺が決まるからです。

これらの画材は、必要不可欠なもの。他は、必要に応じて選んでいます。

——自身にとつて、欠かせない画材を教えて下さい。
鉛筆 修正する、消す、ぼやかす、かすませる…。断定的でも、決定的でもない。鉛筆は、私が考える自分自身によく似ていると思います。

——これからイラストレーターを目指す人へ一言下さい。

Philippe Weisbecker
フィリップ・ワイズベッカー
1942年生まれ。フランス人。パリ、ニューヨーク、バルセロナを拠点に国際的に活動。作品は「ニューズ・ウイーク」「カーサ・ブルータス」「ル・モンド」等、世界の主要な雑誌に紹介されている。

P.5、P.7の作品
作品集「ACCESSOIRES」
(ハモニカブックス刊)より。
P.6の作品
展覧会「Line Work」より。

ワイズベッカー 手の中に鉛筆や筆を握って産まれて来たような方には、私は何も言いません。うらやましいです。他の方には、私はこう話します。「探しなさい。引き返したり、他の方向に再出発したり、出発前に一息入れたりするのをためらってはいけません。あなた方は、金鉱発掘者なのです！」希望があなたを置き去りにしないように

フリップ・ガストンは、60歳で自分の適正を見つけました。私は自分のチャンスが通り過ぎるままにするのだろうか？ 北斎、彼は自分の最高傑作を70から80歳の間に制作しました。

だとしたら、私にもまだチャンスがあるかもしれない！ 何という幸運でしょう！

